



コロナ禍の民俗調査において流れる時間の比較一対面、電話、オンライン調査

人文学部 山口睦

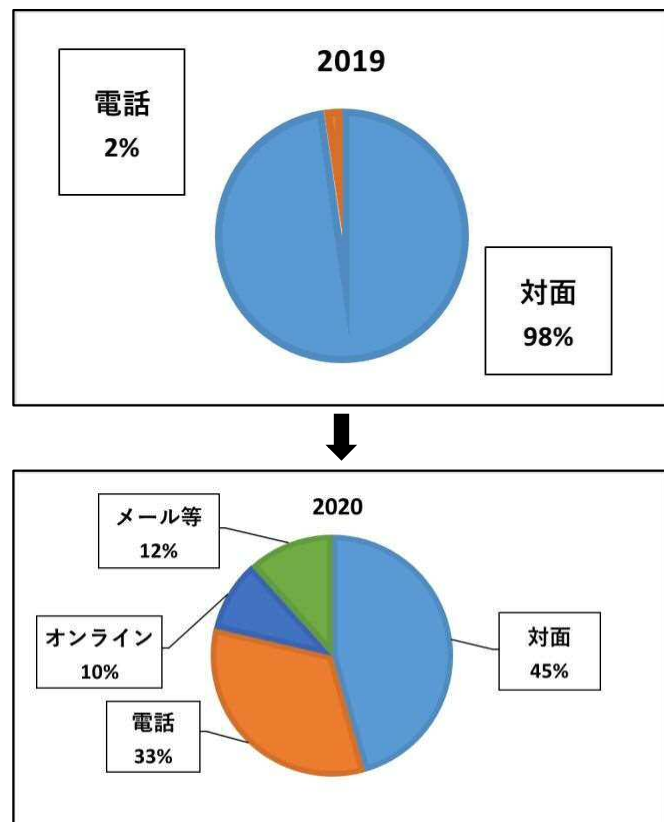
目的：対面でのインタビュー調査を中心とする民俗調査がコロナ禍においてどのような影響を受けたのか明らかにする

対象：2020年度山口大学人文学部社会学コース民俗学・文化人類学分野所属の3年生10名、4年生10名

調査：2021年1月末から2月、調査データの提出、コロナの影響についての質問紙、インタビュー調査

①調査方法の変化（3年次調査実習）

- ・インタビュー件数 2019年7.7件 →2020年7.4件
- ・調査方法の変化



②成果物への影響

- ・3年次調査実習報告

	最多文字数	最少文字数	平均文字数
2019	21,566	12,238	16,617
2020	20,880	6,553	11,658

- ・4年次卒論 2019年度33,790字 →2020年度27,840字

③コロナの影響

- ・祭りやイベントの中止、観光などのテーマが変更
- ・調査対象者を変更、留学生が帰国してしまう
- ・調査地によって調査方法が電話やオンライン、メール、手紙等に制限
- ・コロナ禍ならではの調査、手作りマスク、オンライン居酒屋、飲食店のコロナ対応
- ・電話やオンライン調査のメリット：予約の取りやすさ、移動の時間や交通費の節約、顔が見える、コロナ禍で気を遣わずに調査できる、チャット機能
- ・電話のデメリット：相手の顔が見えないため声だけで判断、時間が短くなる、事務的になる、ジェスチャーが見えない
- ・オンラインのデメリット：回線が途切れる、声が重なると聞き取れない、会話の間合いがとりにくい

結論：多かれ少なかれコロナ禍の影響を受けた
対面インタビューは話者との信頼関係構築に寄与する
大学の調査実習は地域社会の協力の上に成立
コロナ禍の人々の生活を記録する意義



山口大学研究プロジェクト
コロナの時間学 ～新型コロナウイルスが人間と社会に対して与える時間的影響～

研究成果報告書

主研究者	山口 睦	所属	人文学部
共同研究者			
研究課題名			
コロナ禍の民俗調査において流れる時間の比較——対面、電話、オンライン調査			
研究内容と成果の概要			
本研究計画は、対面でのインタビュー調査を中心とする民俗調査が、コロナ禍においてどのような影響を受けたかについて明らかにすることを目的とする。 主研究者の専門分野である文化人類学においては、対面のインタビュー調査や、調査対象者と直接交流する参与観察を主たる調査方法としている。また、学内で所属する人文学部社会学コース、民俗学・文化人類学分野においては、3年生を対象とした民俗調査実習、4年生の卒業論文を同様の手法を用いて行っている。3年生の実習では、例年、山口県内の市町村を1か所選択し、各学生が調査テーマを設定し、9月下旬に3泊4日の調査実習を行っている。2020年度は、新型コロナ感染予防のため泊りがけの調査が不可能となり、各学生の親族・知人等の人的ネットワークを活用した調査テーマを設定するように変更した。また、2020年7月には山口大学内で感染者が発生したため、感染予防を第一として、対面調査ではなく、電話やオンラインインタビューなどの手法を推奨することになった。ここにおいて、従来対面調査によって得られていた人々の生活や地域の行事、習慣などについての聞き取りデータに、コロナ禍における新たな調査手法を用いることによってどのような影響が現れたのかについて、把握、分析する必要性が生じた。来年度以降も新型コロナをめぐる状況は不確定であり、これらの民俗調査に現れた影響を把握することは、今後の民俗調査における方法の選択、教育上必要な配慮、指導方法をアップデートしていくうえでも重要性が非常に高いと考えられる。 2021年1月末から2月初旬にかけて、民俗学・文化人類学分野に所属していた3年生16名、4年生12名に調査協力依頼を行い、各自の調査データ（調査の日付、方法、場所、インタビュー時間、内容）の記入、質問紙により新型コロナの影響について回答してもらった。4年生10名、3年生10名から回答を得て、そのうち18名にインタビュー調査を行い、より詳細なデータを得た。以下の結果を得た。 <u>①調査方法の変化</u> 3年次の調査実習における平均インタビュー数は、2019年7.7件、2020年7.4件であり若干の減少がみられた。インタビュー方法については、2019年対面85件、電話2件、2020年対面47件、電話34件、オンライン（Zoom、LINEビデオ通話）10件、メール・LINE12件となった。卒論について			

は、2020年のデータのみとなるが、対面62件、電話29件、オンライン3件、メール・手紙等18件となった。オンライン調査は2020年に新たにみられるようになった方法であり、対面調査以外の方法が増えたことが一つの傾向である。

②成果物への影響

成果物への影響について、3年次の調査実習報告書における各報告の平均文字数は、2020年の平均文字数が11,658、最多文字数20,880、最少文字数6,553である。2019年の平均文字数は16,617、最多文字数21,566、最少文字数12,238となっており、平均文字数が約5千字減少している。最多文字数はあまり変化していないが、最少文字数は半減している。インタビュー件数が大差ないことから考えると、対面調査の割合が97%の2019年より、対面調査の割合が45%となった2020年では、一件あたりの情報量が減少したことが推測できる。卒論については、2019年度は平均33,790文字、2020年度は27,830文字とやはり減少している。

③新型コロナの影響について

コロナ禍による一番大きな影響は、調査対象の祭やイベントが中止になったことである。また、たとえば観光などテーマが制限され、変更する場合もあった。調査対象者としていた留学生が帰国してしまう場合もあった。調査地や調査相手によって、調査方法を電話やメール、手紙等に制限された学生もいた。その一方で、コロナ禍ならではの調査を行った学生もいた。手作りマスクやオンライン居酒屋、飲食店のコロナ対応などコロナ禍ならではのテーマ、オンライン環境が整ったために可能になった調査もあった。

学生は、対面、電話、オンライン、メール等の調査方法の特徴についてメリット、デメリットを次のように認識していた。電話やオンラインのメリットは、調査の予約がとりやすく、移動の時間や交通費が節約できることである。電話のデメリットは、相手の顔が見えないため、声だけで判断することが難しい、時間が短くなる、事務的になりやすい、身振り手振りがみえないなどがあげられた。オンラインは電話に比べて、顔を見ることができて良かった、コロナ禍で気を遣わずに調査できる、聞き取りにくいときにチャット機能を使って補足できたなどがあげられた。オンラインのデメリットは、回線が途切れたり止まったりすることがある、会話の間合いが取りにくい、声が重なりと聞き取れない、時間差があるなどである。

以上のように、多かれ少なかれ、ほとんどの学生が調査実習、卒業論文の遂行にあたってコロナ禍の影響を受けた。3年次の調査実習では、インタビュー件数については例年とほぼ同様だったが、対面調査は半数を切り、電話、オンライン、メール等が増え、そのためか成果物の文字数は30%減少した。多くの学生が、対面調査以外の方法における難しさを感じた。全体的に、山口県内、特に山口市内の場合は、対面調査がスムーズに行えた場合が多かったようだ。調査対象者が家族、親族、知人の場合でも県境を越えての移動が必要になると、調査地での感染状況によっては対面調査ができない場合があった。各学生は、調査を進めるにあたり、手指の消毒などの感染対策を十分に心がけ、調査前には会食を控えるなど自主的に考えて行動していた。

今後の対応として、新型コロナの感染状況によって、学生、調査対象者の双方にとって実行しやすい調査方法を選ぶ柔軟性が必要とされる。また、常に調査が実行できなくなる可能性を考えて、調査対象者、調査地、調査方法、テーマなどに代替案を考えておく、早めに調査を進めることなども心がける必要があると考えられる。

研究進捗状況・研究成果の公表状況等

論文、学会等発表、実データの利用状況、研究の有用性を広めるための活動など

調査は終わり、データの分析、論文執筆を行っている。現在のところ、以下の学会発表、論文投稿を予定している。

- ・ EAAA (East Asian Anthropological Association) 学会発表予定 (2021 年 11 月 27、28 日)、発表タイトル「The Impact of Covid-19 on Folklore Research」
- ・ やまぐち地域社会研究 19 号 (2022 年 3 月刊行予定) に論文投稿予定